



山形新聞 少年少女の声 (6月26日より)

## スポーツが生む「きずな」 2年 庄司 偉

スポーツは勝つためにするものだと思っていました。勝つために練習し、勝つために全力を尽くす。しかし、道徳の授業を受け、私は勝つためにスポーツをするのは違うと考えることができました。それは、「勝った人には価値があり、負けた人には価値がないのか？」と聞かれ、「そうだろうか？」と考えさせられたことが原因です。勝った人より、負けた人の方が学ぶことが多いと、私も経験して思うことがあったのです。

それは、部活動の試合で負けたときのことです。私はとても悔しい気持ちでいっぱいでした。ですが、悔しいだけで終わらず、何が良くなかったのかを考え練習に生かしていくことが重要だと、その時感じました。

スポーツをする意味は、勝ち負けだけではないということです。勝ったならば仲間と「また勝つぞ!」「やったね」と喜びを共有できます。負けたならば「次は絶対勝つ!」「惜しかったね」と悔しさも共有できます。私は仲間との「きずな」が生まれるから、スポーツは人々に愛されているのだと思いました。

## 夢中になるから打ち込める 1年 仲嶋 望乃

私が考えるスポーツの良さは、やればやるほどスポーツに対する思いが強まり、夢中になっていくことだと思います。スポーツに対する思いが強まると、本気で勝ちたいと思うようになってきます。そこでルールを覚えたりいろいろな技を覚えたりして、その競技に夢中になっていきます。みんな、そういう思いがあるから、日々強くなるために、たくさんの努力をしていると思います。

その中で、オリンピックなどの大きい大会で結果を残せる人はごくわずかです。その人たちは、私たちの見えない所で想像できないくらい、たくさんの努力をし、その競技がすごく大好きな人だと私は思います。水泳の池江璃花子選手は、病気になった時「なんで今」とすごく悔しかったと思います。それは、東京オリンピックで「金メダルが取れる」と期待されていたからです。だからこそ、悔しい思いが強かったと思います。でも、池江選手はがんばって病気と向かいあっています。

このように、世の中は自分の思い通りにはいきません。でも、思い通りにならなかった時、どう行動するかによって未来は変わってくると思います。だから私もそれを信じて、どんなことがあってもあきらめないでスポーツをがんばります。コロナウィルスで、日々スポーツができることに感謝しないといけないのだと気づきました。そして、ふだん当たり前に行っていることにも感謝したいと思います。

